

尾瀬ネットワーク通信

2002年9月22日 VOL.5, No.3(14)

尾瀬自然保護指導員ネットワーク



第3回指導員養成講座(撮影・本戸 信男)

今秋めどに提言作成

尾瀬を守る会が組織強化

尾瀬を守る会(6団体加盟)は八月二日、東京・神田駿河台で代表者会議を開き、このところ頻発している尾瀬をめぐる憂慮すべき問題に対処するため、組織のリニューアルを図るとともに今秋をめどに提言をまとめて広く公表することを決めた。

まず、組織の再編・強化のため役員として、各団体の代表で構成する幹事会を設けるとともに、幹事の互選により会長に中根一郎氏(緑の地球防衛基金常任理事)、代表幹事に内海広重氏(奥利根自然センター所長)、事務局長に高橋喬(尾瀬自然保護指導員ネットワーク代表)が選出された。幹事は次の各氏(五十音順、敬称略)。

塚忠志(群馬県自然保護団体連絡協議会代表)、白田眞輝(尾瀬自然保護指導員福島県連絡協議会代表)、星一彰(福島県自然保護協会代表)。

なお、代議員(各団体2名)に、本会からは椎名宏子(事務局長)、磯部義孝(福島県側幹事)が就任した。

尾瀬を守る会は、尾瀬の自然を守る会の解散を受けて、大石武一氏を中心に一九九七年に発足したが、団体としての体制は整えられていなかった。しかし、尾瀬をめぐる最近の自然破壊につながる不祥事や行政に抗議するためには、組織と連携の強化を図ることが必要と判断。今春から数回の会合を開いて今後のあり方を検討していた。

(高橋喬)

尾瀬にとって多難な年に

救いは若い指導員の誕生

尾瀬のフィールドにお

ける活動も、あと一ヶ月ほどで終わります。毎年思うことですが、半年というシーズンは長いようで短く、現地での活動に参加しようかどうか迷っている、もう参加の機会を失っている という

経験は、皆さんもお持ちでしょう。学生時代に放歌高吟した「あとの半年寝て暮らす」という歌の一節を思い出します。

こんな調子で、この号ではことし尾瀬で起こったイベント（出来事）について感想を述べます。

長蔵小屋よお前もか

いつから日本人は、こんなに低モラルの人種に成り下がったのでしょうか。いつから「ゼニ、ゼニ」というカネの亡者になつてしまつたのでしょ

うか。

政治家がポリシーよりも利権を追求し、企業経営者は商売をすり替えて税金でまかなわれている補助金を手にする「雪印食品や日ハムなど、まさに羊頭狗肉のたぐいでした。

今春、自然保護関係者を唾然とさせたのが、尾瀬の山小屋のしにせ「長蔵小屋」の建築廃材不法投棄事件でした。この問題についてはすでに詳しくご紹介と思いますが、内容は省きますが、まさに入山者を指導すべき立場にある山小屋のモラル喪失です。

ことしは1回きりだった全修協の研修旅行に同行して、バスの中でこの問題を話したところ（口ツジ長蔵と第二長蔵小屋泊まりのためオリエンテー

ションでは話せませんので、関西方面では新聞報道がなく、皆さん最初は半信半疑という表情でした。そこで新聞のコピーを配ったところ、やがて気落ちした声でポツポツと質問がありました。

夜、同室になつた団長さんらとこの問題について語り合いました。団長さんは6年生を10年ほど担当し、あの国語教科書を教えたとか。「バスの中で初めて聞いたとき、頭の中が真っ白になつた。私は子供らに何を教えたきたのやるか」といって絶句されました。

教科書の内容は、美化され過ぎです。直系の三代目までは尾瀬沼の水よりも美しい血が流れていたのでしょうか、四代目の血液中には父親よりも母親の遺伝情報の方が濃く流れていたのでしょうか。

自主的解決法が「1週間の営業自粛」とは、開いた口がふさがりません

でした。環境省には、せめて事件解明まで営業を停止させるくらいは指導力を発揮してもらいたかつたのですが…。

「わたしいま尾瀬」

8月16日、NTTドコモの清水基地局が開局しました。鳩待峠は9月下旬完成の予定だとか。

この計画は当初、見晴と尾瀬沼に基地局を建設するといふものでした。

そこで尾瀬を守る会（1ページ参照）は、小寺群馬県知事、申請者の片品村村長、環境省日光事務所、NTTドコモ群馬支店などへ抗議を行いました。抗議行動にはNWからも事務局長をはじめ磯部、坂本、大橋らの各幹事が参加しました。

現代社会にあつて、ケータイに目くじらを立てるのは時代遅れかもしれませんが、静寂な尾瀬を好む人にとっては、着信音や「私、いま尾瀬にいる」といった通話はある

がたくないはず。また、メールに夢中で木道を踏み外すなんてこともありそうです。

バス添乗解説では、ケータイの使い方などをお願いする仕事が増えそうです。

受講生の3名が10代

暗い話ばかりで恐縮でしたが、最後にとつておきの朗報。今年の指導員養成講座の受講生は6名でしたが、うち3名がなんと10代のヤングパワー。大げさに言うなら史上初の快挙でした。豊田啓彰君（19）は群大1年生、東間未希さん（18）と高都持佑輔君（18）はともに尾瀬高自然環境科3年生です。

いささかひがみつぼく、他人の言うことに耳を貸さずに自己主張ばかりといった高齢の指導員はNWにはいないとは思いますが、彼らに新風を吹き込んで欲しいと期待してやみません。

（高橋喬）

至仏山保全緊急対策会議が主催

(はじめに)

六月二十一日の「至仏山調査登山」に参加いたしましたのでその概要について報告します。

参議院環境委員会(ネットワーク)の陳情を基に平成十四年四月二日、民主党谷博之議員が質疑)で至仏山登山道の荒廃が取り上げられたことにより、ネットワークを含めた民間の自然保護団体も参加しての調査登山が今回実施されたものです。

参加者は総勢三十四名(マスコミ関係者を含む)で、実質上の参加者は群馬県尾瀬保護専門委員の須藤志成幸先生や須永智先生をはじめ至仏山保全緊急対策会議事務局の尾瀬保護財団、地元関係者、東電、尾瀬林業など二十六名でした。

自然保護団体からは日本自然保護協会の横山隆一氏、奥利根自然センターの内海広重氏、そしてネットワークから永島が参加しました。

悪天候のなか、六時鳩待峠集合、説明会、六時十五分鳩待峠出発、十三時三十分至仏山頂、十三時五十分山ノ鼻V C着、マスコミと記者会見、十四時四十分解散。

須藤先生は「笠ヶ岳も登山者が増えて荒れ始めているので、笠ヶ岳を含めて対策を考えるべきではないか」と発言していました。

ネットワークの昨年の調査でも、笠ヶ岳山頂直下で登山道や植生の荒廃箇所を確認しています。また「地球温暖化による多雨(集中豪雨的な雨が多い)によって土壌の流失が加速した(荒廃が

進んだ)のではないかと話していました。G地点(高天原直下の急斜面)では「岩石崩落」の危険もあると指摘していました。

地元関係者からは「当初は登山者の踏圧によって植生が破壊されたが、登山道の整備が進んだ今日では登山道を外れて歩く人はいない。したがって、植生の破壊を防ぐ(植生復元)ために即、登山道閉鎖という理論は実態にそぐわない」という意見もありました。

加藤峰夫先生(座長・横浜国大)は「複合的な要素によって今日の破壊に至った。場所によってその要素も異なるのではない。荒廃も一つの自然現象である」と発言していました。

いずれも、植生復元は極めて難しいという点で意見は一致していました。私もNWによる五年間の継続調査で感じていたが、植生復元のために如何に土壌の流失を食い止めるかが、キーポイントになるように思われました。

標高二千メートルで急斜面に加えて蛇紋岩質という特異な自然環境下で既に地中の岩盤が剥き出しになっている箇所も多数あり、手遅れの感は否めません。

至仏山保全緊急対策会議の今後のマスタースケジュールは次の通りです。

十四年度

保全対策の基本方針のとりまとめ

十五年度

具体的施策の立案

十六年度

施策の実施

それぞれ、同対策会議の幹事会(幹事十五名による構成)で検討することになっていきます。

参加者はアンケート形式で「調査レポート」の提出を求められています。たので、NWの継続調査の資料も添えてレポートを提出しました。

? 土砂流失の現状と今後
の対策
? 登山道の現状と改良の
必要性と可能性

? 登山道のルート変更の
必要性と可能性
? 入山者調整の必要性およびその方法
? 効果的な植生回復手法
の検討(蛇籠、ネット
等)
? 植生回復対策の現状と
評価

なお、提出した調査レポートの要旨は次の通りです。

保護対策等の検討に当たっては、「植生の保護とその復元」を第一に考え、登山道の「通年完全閉鎖」(入山禁止)を含めて、協議を重ねていただくよう強く要望しました。

(おわりに)

特別保護地区の尾瀬(至仏山を含む)は国民共有の原生自然として、私たちには後世に確実に引き継ぐ責務があります。登山道閉鎖によって、至仏山の自然と接する機会が少なくなる、あるいは無くなる、という我慢も必要な時期に来ているのではないのでしょうか。(調査担当幹事 永島勲)

二〇二〇年度活動中間報告

野生ジカ調行われる

～発見頭数五頭～

第二回尾瀬ヶ原野生ジカ調査が、六月二十二日夜半から二十三日未明にかけて行われました。

参加者は、尾瀬ネットの六名に、尾瀬高校環境科から松井教諭引率の十二名の学生が加わり、総勢十九名というにぎやかさでした。山ノ鼻から下田代十字路までを、往路は尾瀬ネットが復路は尾瀬高生が調査器具を担当して歩きましたが、発見数は五頭にとどまりました。これは降りしきる雨でシカの動きが鈍く、またライトに反射するシカ目の目を発見しにくかったことによると思われます。

当初心配していたGPSやビームライトなどの器具の操作はスムーズでしたが、歩行時間の短縮および天候の判断は今後の課題となりました。

尾瀬高校の学生より感想文が寄せられていますのでここに一部を紹介します。

まずはじめにこのような貴重な調査に同行させていただき、ありがとうございます。指導員の皆さんは丁寧な調査方法やシカの現状などを話してくださいました。

夜の尾瀬ヶ原は初めてで最初は歩くのに苦労しましたが、だんだん慣れることができました。あいにくの雨でシカはあまり見られませんが、肉眼で一頭見ることができたのでよかったです。

今後この調査で学んだことが将来に役立てばいいなと思います。

三年 亀山敬子

私は尾瀬ヶ原へ出発する前、とてもドキドキしてました。初めてのシカ調査・夜の尾瀬。こんなすてきな経験ができるなんて思ってた。

も見なかつたからです。

夜の八時から調査に出發することになりました。昼間よりも強い雨が降ってました。出發してすぐ竜宮に小さな光が見えたことに感動しました。

見晴してUターンして尾瀬口ツジまで帰る途中、二頭見つけられました。こんな日でもシカは活動することがわかりました。

今回の調査は、楽しかったけれど正直つらかったです。雨が降りとても寒かったです。ずっと一点を見続けることが、あんなに疲れるとは思わなかつたです。

一年 龍野芳

(坂本敏子)



野生ジカ調査参加者

尾瀬携帯電話基地局 開設反対の署名活動

鳩待峠でピラをまいて下さっていた現場近くの尾瀬を守る会の皆様力になりたいと署名を集めさせて頂きました。幹事会を開いて決める時間もままお願いできそうな方々に事務局の判断により実施いたしました。

書類に不備がありご協力頂けなかつた方には誠に申し訳なく思っております。でも、何とか反対しようとして自分の名前を明記して下さり署名を集めて下さった方々本当にありがとうございます。合計四三八名の署名をNTTドコモ群馬支店長、関本哲也様に送りました。

結果は環境省が許可したことです。片品村が遭難対策が必要であると強調したことで八月十六日に開局してしまいました。誠に残念です。皆様のご協力ありがとうございました。

(事務局長 椎名宏子)

第二回養成講座を 終えて

八月二十二日～二十五日の三泊四日の指導員養成講座が無事終了いたしました。

二十一日受講生六名講師二名が群馬県片品村、一仙に集合し、開講式に続き九十分のオリエンテーションからハードスケジュールの講座が始まりました。

二十一日の尾瀬周辺の天気予報は大きく開いた傘マーク、七時十五分出発時すでに雨、全員雨具に身を包み十人乗りのシャトルタクシーで鳩待峠へ、到着後受講生最年長者の横田有弘さん(65)の指導で準備運動、さすが全日本アウトドア教師協会の山岳ガイドと平伏してのスタートでした。

鳩待峠を出發する頃には雨も小降りになり、樹林帯のコースをただ足下だけを見て歩く。予定通りアヤマ平に着いたときには雨は上がっていました。気温が低く雨具を脱ぐ気にはなれませんでした。アヤマ平の

崩壊した湿原はいまだに無残な痕跡をのこし、如何に広大な面積が裸地化したかを物語っていました。

アヤマ平から富平貞峠へ、そして矢木沢道へ。途中シカの踏み跡、食痕等を観察しながら下田代十字路へ。

山小屋が隣接する通称尾瀬銀座で昼食。同地の弥四郎小屋が隣に新築され、福島県你的生活環境部がドデカイ無料休憩所の立替え工事中で最中でした。近代化を目指す山小屋および稜線内の施設の肥大化を目の当たりにし、行く末の尾瀬を案じながら竜宮を経て山ノ鼻へ。途中悪天候のために荒れ果てた至仏東面登山道は観察することはできませんでした。

山ノ鼻では植物研究見本園 V C を見学し、予定より少し早めに鳩待峠に到着。食事の後夜九時までビデオ等による室内研修で長い一日を終えました。

二十二日、大清水から一ノ瀬、岩清水そして車道建設の終点にて、すさまじい

自然破壊の現状に説明の声がつまる。しかし車道工事の終点に植林されたブナ如若木が数本、ボランティアの手で植林されたものです。我がNWの仲間も参加したと聞いていましたが、今回の受講生も植林そして今年のは下草刈りに参加したとの話を聞きました。

東間末希さん、高都持佑輔君、共に尾瀬高校で自然環境学を学ぶ高校三年生です。そして尾瀬校OBで群馬大一年生の豊田啓彰君らの尾瀬の自然に対する熱意に、未来の尾瀬への希望が膨らみました。

三平峠ではナメ沢の尾瀬沼からの排水口を見学、三平下より尾瀬沼南岸を回り取水口さらに沼尻の堰堤、水門を見学、東岸沿いに尾瀬沼を一周、尾瀬沼 V C を見学、長蔵小屋別館建設時の建設廃材不法投棄の現場を観察。ヤナギランの丘をまわり、沼山峠へ。檜枝岐村では星廣一氏(檜枝岐村前村長)を講師に檜枝岐の歴史と文化について講義を

受ける。

当日尾瀬沼 V C で永島幹事、高橋代表と合流しました。最終日ミニ尾瀬公園の武田久吉メモリアルホール、白旗史朗尾瀬写真美術館、歴史民俗資料館、文化財等を見学。昼食の後無事解散いたしました。

講師の本戸さん、資料その他の準備をしていただいた永島さん本当にありがとうございました。ありがとうございました。本年度も無事講座を終えることができ、受講修了者の多くの方が仲間となられました。新指導員の方々の今後の活動に期待しております。新指導員の方々はぜひ秋の現地活動に参加して勉強の成果を試してみてください。

(磯部義孝)

法人化と 会則改正について

懸案の NPO 法人格取得に向けての作業は、現在、事務局長が鋭意作業を進めています。会則の改正案を高橋が今秋の

幹事会までにまとめる予定です。

現行の会則は尾瀬の自然を守る会解散後、発足までの準備期間が短く十分な討議ができずに作成したため、会則としての体裁や内容が十分であるとはいえませんが、改正のポイントが発足時は前回の指導員の有志が集まった会員ということで検討しましたが、現在の会員に変化があり、学生会員の会費の扱い、非指導員の入会希望者の扱い(参院・谷先生の例)などです。

NPO、会則改正については来春の総会の議題とします。

(高橋喬)

会員名簿の 取り扱いにご注意を

尾瀬ネット会員の皆さまには二〇〇二年度尾瀬ネットの会員名簿を同封いたします。メンバーは本年度も継続して尾瀬ネッ

トへ参加されている方および本年度の指導員養成講座修了者のなかで尾瀬ネットに入会された方です。

最近、個人情報への漏えい問題が紙面をにぎわせております。くれぐれも名簿の取り扱いにはご注意ください。

住所等が変わりましたら早急に事務局までご連絡ください。

尾瀬自然保護指導員ネットワークとは、既に解散した尾瀬の自然を守る会の自然保護指導員の有志が一九九七年三月に設立した「尾瀬の自然保護活動を実践」している民間のボランティア団体です。

尾瀬自然保護指導員

ネットワーク

〒100-0014

東京都千代田区永田町

二のー七の五の二〇三

(株)SEC 内

電話 03-3581-0321

FAX 03-3581-2178

代表幹事 高橋 喬

事務局長 椎名 宏子

編集幹事 若松 真